

## 施しと偽善について

主イエスの「山上の説教」は第6章より新しい段階に入る。この世における生き方の中で、キリスト者は特に神の前に真実に歩むようにと強く勧めていく。偽善者とは、広辞苑によれば、本心からではなく、みせかけから善事をする者のことであるが、主イエスは、マタイ6章1～18節において「施し」「祈り」「断食」というユダヤ人の宗教生活の三大支柱についてのファリサイ人や律法学者の偽善的行為を糾弾しつつ、キリスト者がそのような罪に陥ることがないように戒めている。

ここで偽善者と訳されている言葉は「ヒュポクリテース」で、これは古代ギリシャにおいては仮面をかぶって演技をした役者を意味した。やがてこの言葉の本来の意味が転化して、偽善者を表すようになったのは、きわめて暗示的である。仮面をかぶった役者のように、人々に「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。・・・あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない」と主は言われた。

貧しい者への施しは、神の民イスラエルにとって大きな義務の一つであった。すべての施しは神への献げものであり、貧しい者への施しを拒む者は神を拒むことになることとされた（申命記15：9、箴言16：5、19：17）。エルサレム神殿には特定の場所があつて（沈黙の部屋と呼ばれた）そこに人々が秘かにやって来て、誰にも知られないように贈り物を置いていった、という。古いユダヤ人のことわざも「みせびらかし」を禁じて、「ひそかに施す者はモーセより偉大である」と言い、最高の善行とは「受ける者が施し人を知らず施す者が受ける人を知らない場合」とであると言っている。

しかし、実際は、そのような愛のわざにも偽善が入り込むものであることを主イエスは鋭く指摘された。貧しい人に与え、困っている人に施しをするとき、私たちもしばしば、恩着せがましく与えたり、或いは、人々の前に自分の善行を見せびらかし、人々から感謝と称賛を期待しがちである。

あなた方は施しをする場合、右手のしていることを左手に知らせるな、それはあなた方のする施しが隠れているためである、そうすれば隠れたことを見ておられる天の父がそれに報いてくださる、と主は言われる。これは単に善行や施しをする場合、他人や相手に知られないように気を配れ、というだけではなく、自分自身にもそれを誇るということがないように気をつけよ、というのである。

キリスト者は、人々からの報いを求めず称賛や栄光を求めず、むしろ「隠れたことを見ておられる」父なる神の前に、真実と謙遜をもって愛の業に励むべきことを主は教えられた。

実際、自分のしてきた愛の業が、たとい人々には知られなくとも、神には覚えられていること、私たちにはそのような「天の父」がおられ、やがてそのお方から報いを頂くことができるということ、ここにキリスト者の喜びがあり、希望がある。それ故、或る注解者が適切に語るように、「自分の義を人々の前で知らせる必要はない。右手のしていることを左手に知らせる必要もない。ただ、私を見ていてくださる父なる神がおられるということ、右の手にも左の手にも知らせるべきである」。